敦賀美浜 ふるさと紀行

越前和紙の原料

“菅浜雁皮”を復活

世界で最も美しい紙の原料を復活させたい

菅浜炭焼きの会
浜野健治さん
炭焼きや雁皮づくりをはじめ、森林保全のための植樹など幅広く活動しています。

美浜町菅浜地区で、かつて盛んに採取されていた和紙の原料「菅浜雁皮」。その復活に取り組んでいるのが、地元住民グループ「菅浜炭焼きの会」です。

「私が子どもだった1955年（昭和30年）頃まで、菅浜では雁皮採取が行われ、越前和紙の産地に販売していました」と語るのは、同会の浜野健治さん。

雁皮はジンチョウゲ科の低木で、楮、三椏とともに古くから和紙の原料に用いられてきました。なかでも雁皮紙はカビや虫害に強く、扱い方次第で千年持つとも言われるほど耐久性に優れています。雁皮を原料とした和紙で知られる越前生漉き鳥の子和紙は独特の光沢や風合いが特徴で、国の重要無形文化財に指定。江戸時代、ヨーロッパにも輸出され、オランダを代表する画家 レンブラントも使用した可能性があると言われています。

浜野さんは「越前生漉き鳥の子和紙は世界で最も美しい紙。その原料としてこの地で採取されていた雁皮を自分たちで育ててみたいと思い、栽培を始めました」と、復活への思いを話します。

炭焼き用の原木を伐採した山の斜面に雁皮を植林しています。

苗を山に移植し、約5年かけて栽培

和紙原料として優れた特性を持つ雁皮ですが、難点は栽培期間の長さ。楮、三椏は1～2年で原料にできるのに対し、雁皮の生育期間は約5年。栽培しづらいことから生産者も少なく、これまでは主に山野に自生しているものが用いられてきました。また、雁皮は繊維が強く、漉くとシワになりやすいなど扱いが難しく、採取量の少なさと相まって雁皮紙の生産量も減少。今や希少な存在です。

そこで浜野さんたち「菅浜炭焼きの会」は、2016（平成28）年、地元の行政機関とともに雁皮生産の勉強会を開催。専門家を招いて雁皮づくりを学ぶことから始め、翌年に栽培をスタートしました。栽培に適した山の斜面を整地し、種から苗を山に移植するなど地道に栽培を行い、2021年には5年がかりで育てた雁皮の採取にこぎつけました。

菅浜雁皮を使った越前生漉き鳥の子和紙の復活には、越前市今立地区の和紙職人にも協力を依頼。できあがった鳥の子和紙は、柔らかな光沢があり、触れるとすべすべとした滑らかさ。「世界一美しい」という浜野さんの言葉もうなずけます。

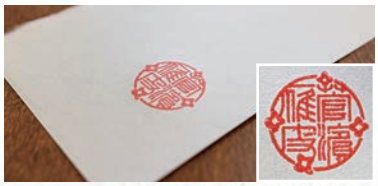
雁皮は表面の皮を剥いで和紙の原料とします。横には簡単に裂けますが、縦に引っ張ると千切れないほどの強度があります。

「菅浜雁皮」を文化財として残す

和紙づくりは、原料となる植物の皮を剥ぎ、アルカリ溶液で煮込んだ後、繊維を叩きほぐし、「ネリ」と呼ばれる粘液を加えて漉きの工程に入ります。このアルカリ溶液に使われているのが、炭焼きで排出される木灰です。

「古くから炭焼きと雁皮採取はこの地で生活の糧を得るための重要な仕事で、この2つがうまく循環して成り立っていたんです」と浜野さん。地元を支えてきた菅浜雁皮を「文化財として残したい」という強い思いが活動の原動力となっています。

現在は廃校となった地元小学校校舎を拠点とし、若狭路文化研究所とも連携しながら雁皮に関連するさまざまな活動を行っています。菅浜雁皮を使った和紙づくり体験をはじめ、1階の展示コーナーには雁皮の成り立ちや歴史を紹介するパネルや、地元の画家や書家の作品も展示。古文書の修復にも雁皮和紙を活用するなど、その活動の幅は広がっています。



浜野さんたちが栽培した雁皮で作った鳥の子和紙。地元の画家や書家にも愛用者が多い。「菅浜雁皮」の落款印で認知度向上を図っています。

●この記事に関するお問い合わせ
菅浜炭焼きの会 浜野氏
kh-hama1970@kl.mmnet-ai.ne.jp

発行所 ■ 日本原子力研究開発機構 敦賀事業本部＝〒914-8585 敦賀市木崎65号20番地
☎0770（23）3021 ホームページ https://www.jaea.go.jp/04/turuga/（2022年12月発行）